

月影



第76号

令和五年七月一日発行
浄土宗西山禅林寺派
常林院



雨の日も
雲の上は
晴れている



見ているものが
すべてではない

目に映る

その奥に

見えない**眞実**が

隠れている

こともある

開宗八五〇年

法然上人の生涯

【十三】

建永の法難



松虫と鈴虫

京都鹿ヶ谷しがたにに安楽寺と
いうお寺があります。

安楽寺では法然上人の
弟子、安楽と住蓮が「六
時礼讃」(一日六度、決
まった時間に節のついた
お経で阿弥陀仏を讃え念
仏する法要)をおこなっ
ていました。そのお経の
美しい旋律は当時の人々
の心をとらえました。

その法要に後鳥羽上皇

が可愛がっていた松虫と
鈴虫という姉妹の女官が
参加しました。

ちようど後鳥羽上皇が
熊野に参詣するため朝廷
を留守にしていた間に安
楽寺へ行った姉妹は、六
時礼讃があまりにも素晴
らしく、そのまま出家し
てしまったのです。

熊野から帰ってきた後
鳥羽上皇は、松虫と鈴虫
が出家したことを知ると

激怒し、法然上人の専修
念仏に対し厳しい弾圧を
おこないました。

厳しい弾圧

安楽と住蓮を含む四名
は死罪となりました。当
時、公式に死刑が行われ
ることがほとんどなかつ
た時代に、この処罰は大
変厳しく重いものでした。
そして、お念仏は禁止
となり、弟子の不始末は
師匠の責任として、法然
上人と親鸞聖人を含む弟
子七人は鳥流しとなりま
した。

法然上人は四国へ流罪
となり、親鸞聖人は越後
へ、他の弟子たちも各地

に流罪となりました。

我が派祖の西山上人
にも一旦は流罪が下りま
したが、九条兼実かねざねの弟で
天台座主てんだいざすを務めた慈円じえんの
庇護ひごがあり流罪を逃れて
います。

この一連の出来事は建
永元年(一二〇六年)に
起こりました。法然上人
七十五歳の時のこと。
「建永の法難ほうなん」と呼ばれ
ています。(つづく)



安楽寺



仏事と

作法

百ヶ日法要



満中陰まんちゆういんの法要を終え、忌明けきあけが済むと、次に「百ヶ日法要ひゃつかにち」を勤めます。

百ヶ日法要とは、人が亡くなって百日目に勤める法要のことです。

泣くのを卒業する

百ヶ日法要には別名があります。「卒哭忌そつこくき（そつこくき）」と呼ばれます。

す。

「卒」は卒業の卒。

「哭」は「哭なく」

の哭。「哭く」は「泣く」

よりも、もっと深い悲し

みに襲われたときに使わ

れます。

つまり、卒哭忌そつこくきとは、

「哭くのを卒業する法要」

という意味があります。

大切な人が亡くなって

百日が経ったとはいえ、

悲しみがすべて消えたわ

けではありません。もし

かすると、悲しみがより

増している方もおられる

かもしれません。

でも、この百ヶ日法要

を一つの節目として、明

日から少しずつ日常生活

にもどって行きましょう、
という意味が込められて
いるのです。

癒される法要



百ヶ日法要では僧侶を
招き読経まねどきぎょうしてもらいま
しょう。

遺骨は仏壇の前、経机
などの上に安置します。

経机には、線香、花、口
ウソクの三具足みつぐそくを供えま
す。



三具足

満中陰が終わり、次の
大きな節目の壺周忌法要
にはやや遠いこの時期。
百日目に勤める百ヶ日法
要は、慌ただしく過ぎて
いった通夜、葬式、中陰
法要といった葬送儀礼が
一段落し、少し気持ち
落ち着いた時期に勤める
法要といえます。

ゆっくり故人と向き合
い、心の対話をしながら
法要に臨むのぞことができま
す。

法要は、供養する者と
供養される者が出会う場
であり、両者のために行
うものです。故人を供養
することによって遺族の
心も癒いされていくのです。

彩
寺
記

立教開宗八五〇年記念東大寺法要

去る五月三十日に奈良東大寺において、浄土宗西山三派せいざんさんぱの禅林寺派・西山浄土宗・深草派の僧侶約二百人が、浄土宗開宗八五〇年のお待ち受け法要として、大仏様の蓮華座れんげざの下で記念法要を勤めました。実は法然上人は東大寺で講述こうじゆつをするなど深いご縁があるのです。

二百人の僧侶が大仏殿まで行列で練り歩き、法要が始まると読経が大仏様を包み込む荘厳な雰囲気、多くの修学旅行生や観光客は、皆足を止めて聴き入っていました。

雑記抄
蓮れん

六月十日。愛犬「蓮れん」が亡くなって一年が経ちました。当寺に来て十七年。番犬として活躍してくれて、寺族にとつてとても心強い存在でした▼しかし、老いていくにつれて視力が落ち、足が弱り、歩けなくなり、寝たきりになり、最後は老衰で亡くなりました▼その老いていく姿は人間と同じでお釈迦さまの教えのとおり「生老病死しょうろうびやうし」の過程を辿たどっていくものでした。しかし、足が弱っても懸命に歩こうとしたり、日々、生きようとする姿から、たくさんのごことを

教えられた気がします▼「蓮ちゃんっ」と檀家の皆様からも声をかけて可愛がってもらい、とても幸せな一生だったのではないかと思えます▼晩年はほとんど鳴くことがなかったのですが、最後の日、一声鳴いたので手を握にぎってやると静かに浄土へ旅立っていきましました。あのひと鳴きは、お別れの言葉だったのかもしれない。



元気なころの蓮